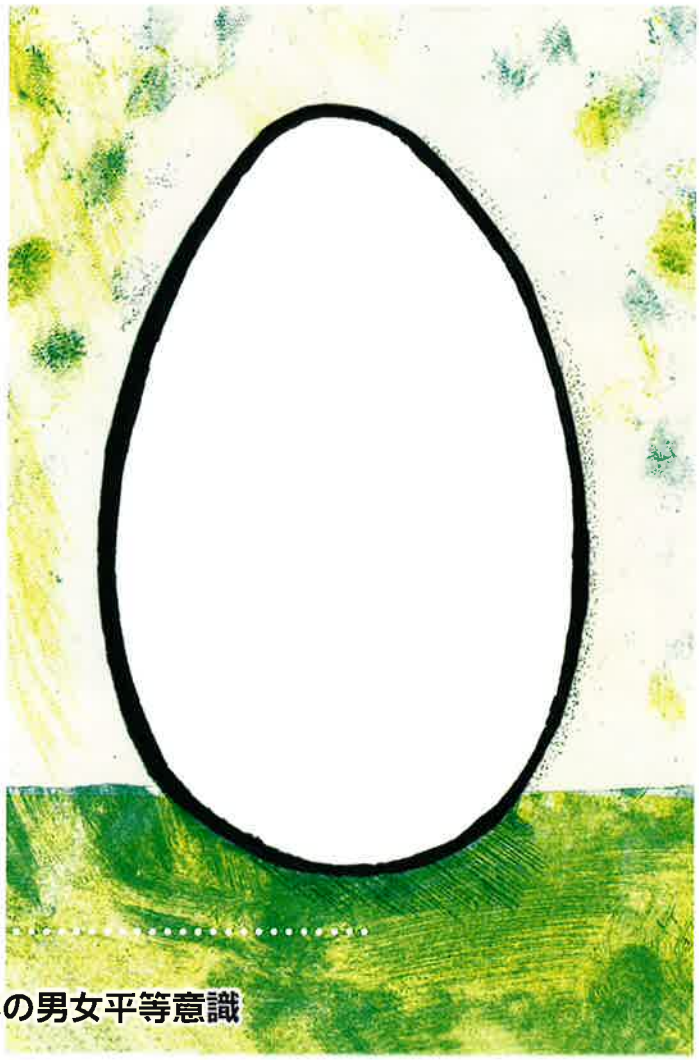
ありーて

高岡市男女平等推進プラン情報誌
14 号 2003年11月



もくじ

統計からみた日本の男女平等意識
作品紹介
ありーて編集員がおじゃまします
セピア色の写真から
こんにちは男女平等・国際交流課です

「ありーて」は自分の力で問題を解決していくイギリスの童話「アリーテ姫の冒険」の主人公の名前です。「私の未来は私が創る」とアリーテはいいます。

統計からみた日本の男女平等意識

「国際比較でみた男女共同社会の状況」

内閣府は、今年20年ぶりに、日本と諸外国との女性の参画状況や背景となる制度・意識を比較・分析した内容を盛り込んだ「平成15年度版男女共同参画白書」を発表しました。

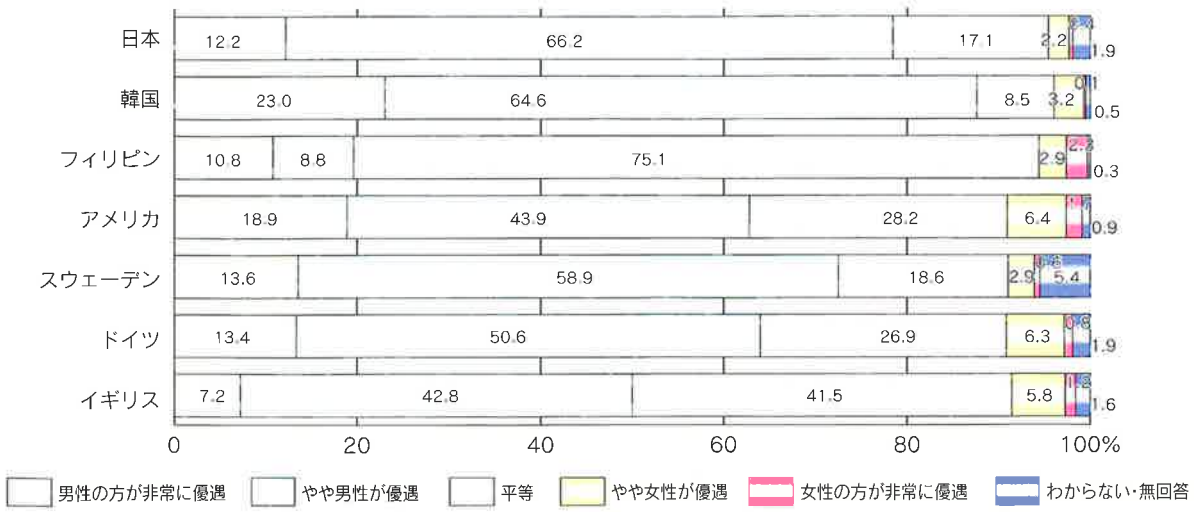
今回の「ありーて」では、この白書から諸外国との統計の比較でみた、日本の男女平等・共同参画の状況についてご紹介します。

1 「男性が優遇されていると感じている割合」

社会全体でみた男女の地位の平等感をみると、フィリピンを除き各国とも男性が優遇されているとする割合が高く、特に日本と韓国で非常に高く、次いでスウェーデンとなっている。

男女共同参画が最も進展しているスウェーデンで不平等感が強いのは、男女共同参画が浸透し男女平等という意識が高まっている中で、制度上の男女平等が進展しても理想とする平等は達成されていない状況が強く意識されていると思われる。

■社会全体でみた、男女の地位が平等になっている程度（男女計）

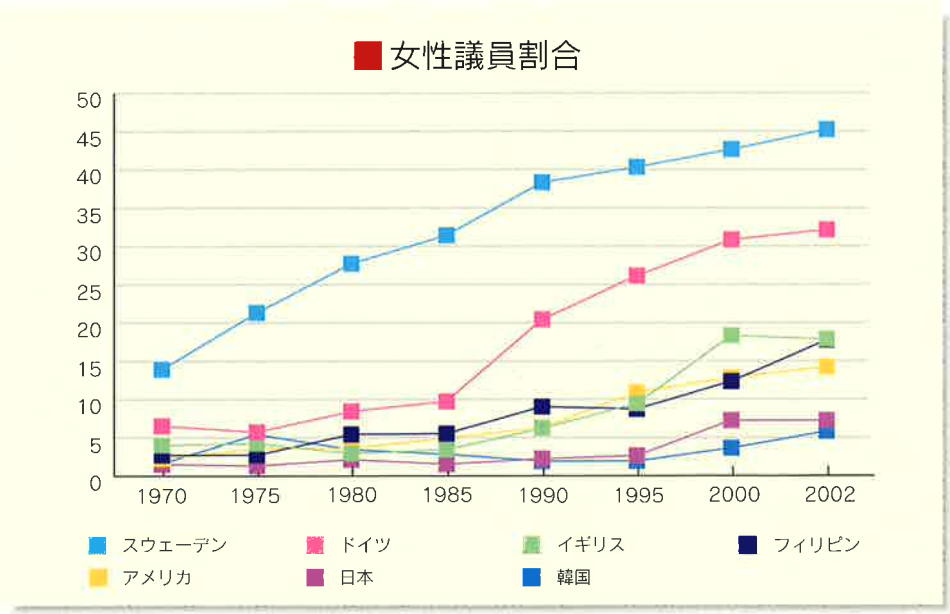


2 「女性の政治への参画状況」（国会議員）

１９７０年から２００２年までの変化をみると、すべての国において、女性の国会議員の増加がみられるが、その増加の時期や増加のスピードに差がみられる。

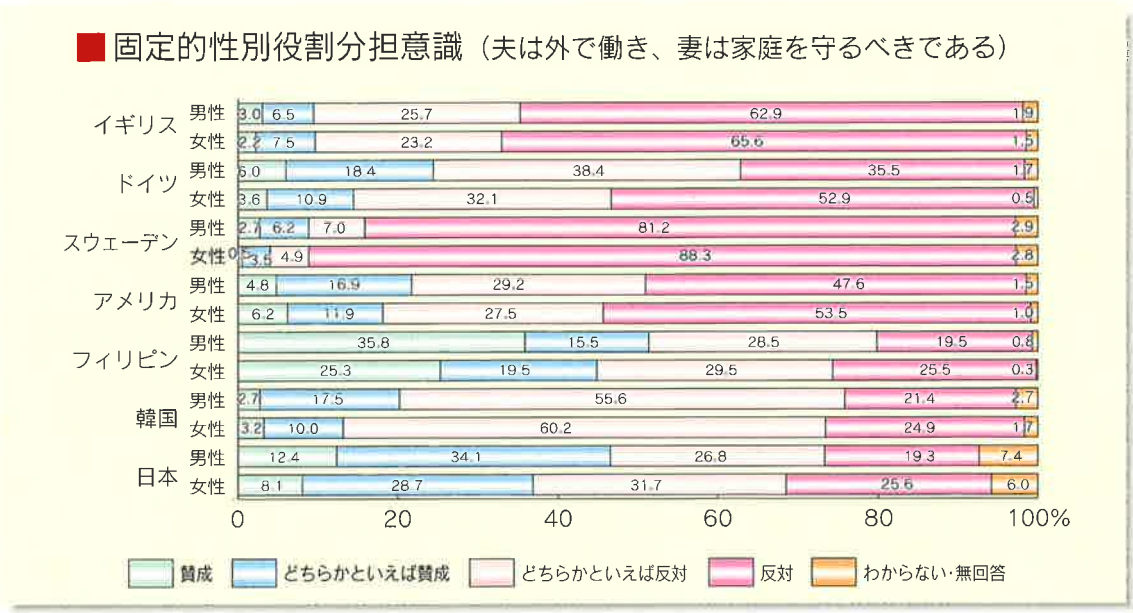
スウェーデンは、１９７０年代から高い水準となっており、１９９０年に約40％となるまで着実に増加し、２００２年では45・３％となっている。その他の国おいては、１９７０年から85年まではどの国でも低く、ほとんど差がない状況であったが、ドイツ、イギリス、アメリカでは１９８５年以降に増加がみられ、特にドイツでは１９８７年の選挙において大きな伸びを示し、２００２年では32・２％となっている。

日本、韓国では、１９９５年以降上昇しているものの、その伸びは小さく、２００１年でも10％を下回る状況となっている。



3 固定的性別役割分担意識

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という役割分担意識についてみると、欧米諸国では、「賛成」、「どちらかといえば賛成」とするものは少なく、特にスウェーデンで顕著である。これに対して、日本、フィリピンではやや多くなっている。



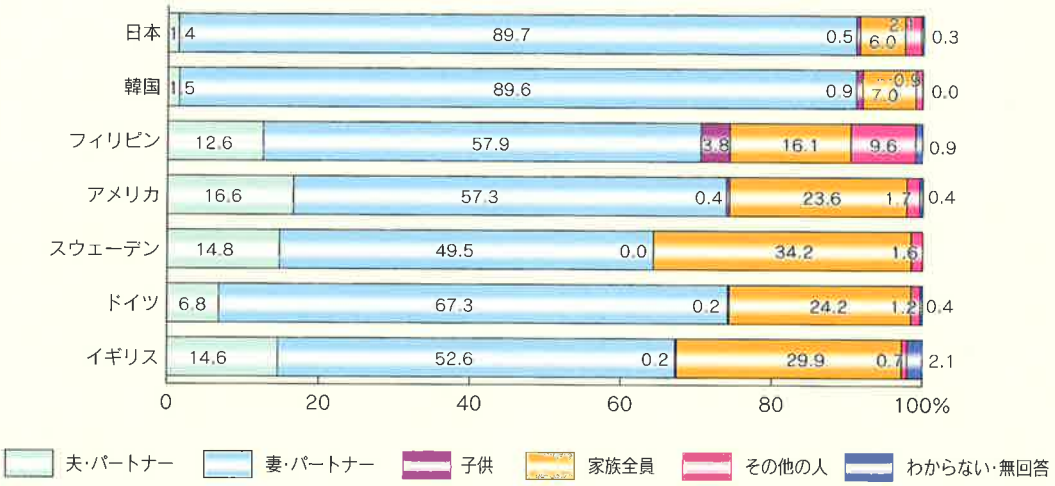
4 家事労働の役割分担

育児期にある夫の育児及び家事時間（以下、「家事関連時間」という。）についてみると、日本は2001年において0・8時間で、スウェーデンの1991年における3・7時間、ドイツの1992年における3・5時間と比較して短い。

2001年の日本の育児期にある夫の家事関連時間は1996年の0・6時間から0・2時間増加したが、育児期にある有業者の妻の家事関連時間は1996年の5・4時間から2001年の5・6時間と0・2時間増加しており、男女間の差は4・8時間と依然として大きい。

個別具体的な役割分担の実施状況をみると、食事の支度については、日本では妻が89・7%、夫が1・4%、家族全員が6・0%であるのに対し、スウェーデンではそれぞれ49・5%、14・8%、34・2%、イギリスではそれぞれ52・6%、14・6%、29・9%となっている。日本では妻に偏りがあるのに対して、欧米諸国では比較的家族全員で行う割合が高い。

■家事分担の状況（食事の支度）（男女計）



※以上の分析・データは「平成15年版男女共同参画白書」より

「男女共同参画白書を見て」

データからは、日本の女性は欧米諸国等の女性に比較して社会参画は低い水準にとどまっている状況であることがわかった。日本は依然として、固定的性別役割分担意識が根強く存在しており、それが女性の社会参画が進まない一つの大きな要因と思われる。仕事と家庭において、女性の社会参画を推進していくには、仕事と家庭、子育てを両立できる環境整備を強化していくことが必要とされる。

相手の考え方や意識、家庭ではパートナーの考え方をお互いに認め合っていけば、男女が仕事にも家庭生活にもバランスよく参画できるような社会をつくり出していくことができるのではないでしょうか？

作品紹介

ブック

「幸せ探し、自分探し」

舘野智子著／北日本新聞社

この本に登場している人達は、現在富山県に暮らしている女性である。

過去の人ではなく、あなたや私の隣りに共に生活している。彼女たちに共通しているのは、ありのままの自分を素直に認めて自分らしく生きていることだ。

一人ひとりの生活空間は全く違うのに、困難や悩みにぶつかった時、あきらめるのではなくて、どうにかならないかと必死に模索し、今、自分がしなければいけない事は何なのか、今、自分がしたい事は何なのかをそれぞれの手法で体当たりし、自分の道を切り開いていっていることがよくわかる。

彼女たちは、時には過激で無茶とも思えるかもしれないが、決してそうではない。

がむしゃらだけにその必死さが可愛く思えることすらある。私はこの本の中に出てくる10人の方といろんな機会に話すことができた。がむしゃらともみえる行動力は生きるエネルギーであり、人と人をつなぐ心の炎なのだと思う。誰もが自分の未来を生きたことはないが、結婚、出産、育児をしながら仕事を続け、未来につなごうとしていることは確かである。

彼女たちは決して特別な人ではなく、今を生きる女性たちと同じように悩みを抱えてきているだけなのだ。

読み終わって思うことは「良い事も悪いこともひっくるめて、自分に責任をもって生きる」ということであった。

いろんなことが悩みや問題として誰にでも起きるからこそ、彼女たちの生き方は実感できるし、さわやかな気持ちにさせてくれる。

芝居

「真珠の首飾り」

劇団青年劇場

グレンミラーのジャズの名曲「真珠の首飾り」にのって幕が開くと、そこは、トップシークレットとして語られなかった日本国憲法の草案作りの場所でした。

わずか一週間で日本国憲法草案を作成した25人のGHQ民生局員たちの動きが、青年劇場の芝居になったのです。脚本は、ジェームス・三木さんです。なかでも当時22歳だったベアテ・シロタさんに注目せざるをえません。

ピアニストのレオ・シロタさんを父に持ちウイーンで生まれたベアテさんは5才で日本に来ます。1938年の15才で日本を離れるまで、日本で生活し、日本社会を見てきた彼女は、女性の人権条項を担当することになります。指名されたベアテさんは東京中の図書館を駆け回り、全世界の憲法を取り寄せ、そこから女性の権利を憲法で保障させるための条項を書き出します。

両性の平等、女性の参政権はもとより、出産、育児に関する保障や社会福祉にまで幅広い権利が書き込まれます。

当時、自由に結婚もできず、離婚もできない、財産権も相続権もなく、住居の選択もできず、参政権もない日本の女性たちを忘れることができなかったとベアテさんは言っています。

22才の若きベアテさんと、現在のベアテさんが話し合う場面は、私たち観る側にいろんなことを考えさせ、舞台に引き込まれる迫力と魅力がいっぱいです。

日本の女性が不平等と忍従の生き方をしいられているのを見てきたベアテさんが、男女平等を盛り込むために大奮闘するくだりは感動的です。

※ベアテさんは（79才）今もお元気で日本各地で講演されています。

ありーて編集員がおじゃまします

平成15年度男女共同参画講座（市民企画講座）
「わたしたち的ジェンダー」

～高校生による男女共同参画・ジェンダーに関するパネルディスカッション～

コーディネーター　富山県男女共同参画推進員高岡連絡会会長　須賀泉美さん

今回は、7月26日に行われた高校生によるパネルディスカッション「わたしたち的ジェンダー」におじゃましました。

この企画は、事前に高岡市内にある11の高校で男女共同参画に関するアンケートをとり、前半は各校の代表者による高校ごとのアンケート結果の説明、後半は、そのアンケート結果をもとに、ジェンダーについて、自由な意見交換が行われました。

後半のパネルディスカッションの様子を報告します！

「ジェンダー」ってなに!?

最初、ジェンダーという言葉の意味は参加したパネリストの皆さんがわかりませんでした。

そこで、コーディネーターの須賀さんは「普段の生活の中で男女平等ではないと思う点は？」と問いかけられ、その質問に対し、男子からは「男子が悪いことをすれば、きびしく怒られるが、女子はさらに悪いことをしても、男子ほど怒られない」、女子からは「普通に生活していると、特に男女不平等だと感じることはない。映画館のレディースデーは不平等では？女性は得だけど」、「男らしさ、女らしさを考えると、一概に不平等だとは言えない」という意見が出ました。

「ジェンダー」とは、男らしさ、女らしさといった社会的・文化的に形成された男女の違いのことで、社会や家庭において「男は男らしく、女は女らしく」と要求されると、ジェンダー意識が作られ、「男は仕事、女は家庭」という固定的な性別役割分担意識を持つようになってしまうとされています。

「将来のこと」

男子：「今は子育ては女性の負担が多いけど、将来は自分は協力して子育てしていきたい」

女子：「職場では男女平等な扱いをしてほしい。でも、子供ができたら、仕事は辞めて、子供が小さいうちは子育てに専念したい」

女子：「家庭生活では家事分担など男女平等意識が高まっているけど、実際に今の高校生が大人になったら実行できるかな」

今回のパネリストの中では、女子では、（意外にも!?）「仕事もしたいけど仕事よりは家庭を重視する」という意見が目立ったのに対し、男子は、「能力重視の社会でいい」、「保育園の迎えも積極的にやりたい」といった意見が目立ち、女性の社会進出に対し積極的な考えを持っている人が多かったです。

男子のほうが、女子よりも社会的役割に捉われていないようだ、と須賀さんがまとめられました。

パネリストとして参加した高校生の皆さんは、今回の講座が、いつのまにか無意識に捉われているジェンダーについて考える、よいきっかけになったようでした。

今回の講座に参加して、男らしさ、女らしさに捉われすぎずに、自分らしい生き方を見つけられたらいいなと感じました。

セピア色の写真から

愛山桃代子さん

とても暑く向日葵がきれいにさきほこるそんな日、今回の主人公愛山桃代子さんにお話を伺いました。

愛山さんは大正9年生まれ。職人の父と看護婦の母のもとで育てられました。その後3人の妹さんも生まれました。その頃の愛山さんの夢は「学校の先生」でした。愛山さんの子供の頃は男性が上という風習がとても強く、男性の一番風呂などは当たり前で、女性は一歩後ろからついてくるという時代であったが、愛山さんの家ではそんな風習がなかったそうです。

今日この頃は男女平等問題が多く取り上げられ、そういった風習も変わってきていますが、当時の時代では愛山さんの家のあり方は、非常にめずらしいものだったようです。愛山さんのお父様は子供が生まれると神棚にいつも感謝の気持ちをのべていたそうです。家庭のあり方、意識、価値観を両親から学ばれたとお話されました。

そして20歳の時教師になられ、小さい頃からの夢が叶いとてもうれしかったと、当時の頃からの教師生活を振り返られました。

33年の間に1年生を11回担任され、1年生の担任がとても楽しいと言われます。「これからの6年間が決まるし、この時に学校が嫌いになると学校の楽しさがわからないままになってしまう」と。そんな中、生徒さんと毎日交換日記のように文章の交換をされました。愛山さんは、交換日記の中でいろいろな生徒さんの心をくみ取るためにも作文指導に力を注がれました。その積み重ねで「あぜみち文集」「あぜみち詩集」を根気強くだしていたのが目にとまり、作文で全国特別推薦を頂かれました。それから生徒や父兄さんとの大きな橋わたしになったと言われます。

そんな愛山さんは、23歳の時2つ年上の夫と結婚されました。4人の子供さんに恵まれて楽しく暮らされ、子供さんが3歳になるまでは、教職と子育てを両立させて自分の手で育てると決めていたそうです。そのため旦那様もいろいろお手伝いくださったそうです。

現在は、教職を33年間続けてこれたことの恩返しに少しでも皆さんの役に立ちたいといろいろな機会に、講演会などで様々な話をされておられるそうです。趣味では、和紙工芸師の免許もとられ、老人ホームなどで指導にもあたられておられます。

「やっと80歳になった」といつも思うそうです。何事も前向きに生きることが大切と思って生きてこられた姿勢にとても感銘を受けました。

愛山さんは、たくさんの方に生きる道や勉学の楽しさを教えてこられたと思います。

現在も教え子さんがたびたびおとずれられるそうです。

愛山さんはいつも笑顔で迎えてくださいます。

愛山さんの笑顔をおみやげに家路につきました。

写真左:愛山さん

こんにちは 男女平等・国際交流課です

●「高岡市男女平等推進条例」を制定しました

男女が性別にかかわりなく個性と能力を十分発揮し、市民の一人一人が自分らしく輝いて生きることのできる高岡市の実現を目指して、今年６月に制定しました。施行は平成16年１月１日です。

●市民参画で検討してきた条例です

この条例は、高岡市男女平等推進プラン推進市民委員会（会長・大石昂富山大学生涯学習教育研究センター長）が、「市民の方々の意見を聴くフォーラム」や10回にわたって開催した界層別フォーラム、その他団体等から寄せられた多くの意見を踏まえ慎重に検討され、今年１月30日市に提出された提言を基に、審議を重ねて制定したものです。

●だから、条例をつくりました

憲法に、個人の尊重と法の下の平等がうたわれ、男女平等の実現に向けて国においても高岡市においても様々に取り組んできました。でも、大切な方針や意思決定の場に女性が少なかったり、男女間の不平等を感じることがまだまだ多くあります。
そして、これから更に進む少子高齢化などの社会的変化に対応していくためには、一人一人があらゆる分野に参画し、個性と能力を十分発揮できるような社会づくりが重要です。

●この条例がめざす社会像は

・家庭、職場、地域社会等あらゆる場において、性別により差別されたり、固定的な役割にとらわれたりすることなく、男女の人権が尊重される社会
・一人一人が自立した個人として能力を十分に発揮し、多様な生き方が選択できる社会
・政策または方針決定過程に男女が平等に参画する社会

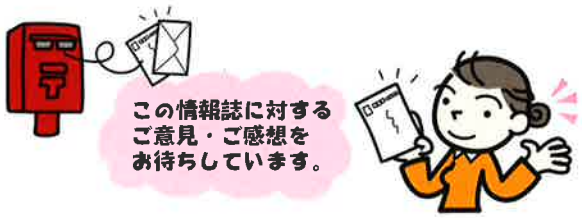
このような社会にしていくために、この条例の制定や来年度４月には高岡駅前の再開発ビルに「高岡市男女平等推進センター」を開設することとしており、男女平等・共同参画の推進に関する施策を積極的に展開しています。

編集後期

友達からは、時々、それぞれの夫婦関係を聞かせてもらう。
Ａさんの夫は、亭主関白でＡさんは夫の機嫌を損ねぬよう夫に仕えている。
Ｂさんは、共稼ぎ夫婦で、家事、育児の分担を決めた覚えはないが、お互い自分ができる事はするという自然な形で今までやってきた。いろいろな夫婦関係はあるのだろうが、相手ばかりに求めたくなる気持ちは私も持っていると思う。でも、相手に喜んでもらおうという思いが、やはり大事なのかも。 ●朴木満裕美

「男女共同参画社会」と声高らかに言われ、新聞紙上でもこの頃目を目にすることが多くなった。
気にすればいろんなところで着実に進んでいることを感じる。共稼ぎ率が全国のトップクラスの富山県であればなおのこと男女共同参画がもっと進んでもおかしくはない。
しかし、性別役割分業の意識はそう簡単にはくずれそうにもない。だが、若者たちの結婚観というかスタイルは50代の自分からみれば自然にお互いを助け合い、男だから、女だからということを区別せずに協力していることにほほえましく思える今日この頃である。
●中川悦子

忙しい毎日の中では、気になることがあったとしても次の瞬間には忘れて、気に留めなくても特に不自由なんて感じることはなくて・・・。私にとっての「それ」が、男らしさ、女らしさ、ジェンダーでした。
今号で「わたしたち的ジェンダー」の取材に行き、ジェンダーフリーとは、女性も男性も同じように働いたり、恋愛したり、子育てをして、同じように生きる権利があることだと思いました。ただ、どんなスタイルが自分に合っているのか模索し、よりよく生きようとすることが大事で、その過程で今回のような講座への参加などの生き方をちょこっと見直す機会が何らかのプラスになるのではないでしょうか。いつもよりちょっとだけ腰を据えて考えてみたり、普段あまり真剣に考えないことに意識をめぐらせてみる、読者の方にとって、そういう材料に「ありーて」がなればいいなあと思っています。 ●篠原エリ

今回の「ありーて」はどうでしたか？
私事ですが、最近、就職活動のセミナーを受けています。
女性を対象にした就職セミナーがあり、女性の就職の厳しさをとても感じました。
男性、女性の差別のない、雇用均等をとても強く思いました。
●遠藤真紀子

発行／ 高岡市企画調整部男女平等・国際交流課
〒933-8601　高岡市広小路7-50
電話／0766-20-1262　FAX／0766-20-1646
MAIL／oo-koku@office.city.takaoka.toyama.jp